

包山楚簡「凶」字の訓釈をめぐって

大西克也

包山、望山、九店、天星觀、秦家咀等の戦国時代中後期の楚簡に「凶」という文字が使われている。下に「心」を伴い「恩」に作ることもある。

(1) 宋客盛公鵬粵(聘)於楚之戡、留郢之月乙未之日、鹽吉以保家爲左尹屹貞(貞)……「自留郢之月以稟(就)留郢之月、出内(入)事王、聿(盡)卒(卒)戡(躬身)恩(尚)毋又(有)咎。」占之……「死貞吉、少又(有)憊(憂)於(躬身)、敵(且)志事少迟(遲)得。」以元(其)古(故)敝之。恩攻解於人愚(禹)。占之……「甚吉。咎(期)申(中)又(有)惠(喜)。」(包山楚簡一九八)

宋客盛公鵬が楚を訪問した歳(甲寅三二八年)の留郢の月(楚曆四月)の乙未の日、鹽吉が保家(占具)を用いて左尹屹の為に卜貞を行なった。「留郢の月から留郢の月に到るまで、朝廷に出入りして王に事え、一年間を通じて、身体に災いがありませんように(ないだろうか?)」。占うと「恒貞は吉、身体にやや心配があり、且つ願う事はやや遅れて叶う」と出た。その故にお祓いをする。人禹の神に「攻解」(祟りを解除する)すること。「恩」する。⁽¹⁾(それから)占うと、「大吉、一年以内に慶事がある」と出た。

(2)……占之…「死貞吉。少又(有)億(憂)於軀(躬)身、叡(旦)外又(有)不愆(訓・順)。」以斤(其)古(故)岐之…畢禱楚先老僮、祝融(融)、媼(鬻)畜(熊)各一。凶攻解於不殆(辜)。苛稻(嘉)占之曰…「吉。」(包山楚簡二二七)

……占うと、「恒貞は吉、身体にやや心配があり、また外で意に添わぬことがある」と出た。その故にお祓いをする。楚の祖先老僮、祝融、鬻熊にそれぞれ雌羊一頭を供えて畢禱する。不辜(冤死者)に「攻解」すること。「凶」する。(それから)苛嘉が占うと、「吉」と出た。

この字は当初整理者によって「鬼」や「界」と訓釈された(劉彬微等一九九一、注二二五及び三三三、彭浩一九九一、三三九頁)。「説文」巻九上に於て「凶、鬼頭也」(數勿切)と訓じられた字と同定したのである。しかし望山一号墓楚簡に

(3)𠄎以窺(寶) 豕爲固固貞(貞) …既𡗗(座)、以心愆𡗗(然)、不可以𡗗(動) 思(思) 擧身、𡗗(望山楚簡一一三)

【𡗗】豹(人名)が宝家(占具)を使って𡗗(悼)固の為に卜貞を行なった。「𡗗(腫れ物)」ができた上に、心臓がぐの状態になり、思考したり体を起こしたりすることができなくなり、𡗗

とあつて、問題の字が「思」と釈されることから(朱德熙等一九九六、二三八頁)、例(2)のように、「思」と同一の文脈で使われる「凶」も「思」と訓むことが定着してきた。⁽²⁾つまり「凶」を「鬼頭」の「凶」(フツ)ではなく、「思」の諧声符で「説文」巻十下に於て「頭會𡗗蓋也」と解かれる「凶」に同定するのである。伝世文献では『楚辞・離騷』に「恩九州之博大兮」とあつて、王逸が「恩、古文思、亦作思」と注している。⁽⁴⁾

このように文字に関しては「凶(思)」と釈すのがほぼ共通の認識となつているが、しかし語のレベルでの解釈はかなり分かれている。私の知る限りではおおよそ次の3種の訓釈がある。(1)発語詞説。王引之『経伝釈詞』巻八に収

める発語詞「思」と解釈する。曾憲通（一九九三B、四二二四一三頁）、何琳儀（一九九三、六〇頁、一九九八、一一六三頁）、于成龍（一九九九、一六八頁）。(2)願望説。「囟」を含む文が願望の意を表すと解釈するが、後述するように、論者によって詞性の理解が異なる。李零（一九九二、五頁⁽⁵⁾、一九九三、四四二頁）、工藤元男（一九九六、九二頁）、陳偉（一九九六、三二一三三頁）、池澤優（一九九八、二六頁）。(3)使役動詞説。「使」の仮借と解釈する。陳偉（一九九四、六九頁）。但し陳偉（一九九六）では(2)説を採用している。従って現在では(3)説を取る論者はいない。しかし私見は(3)説に傾いている。その理由を以下に述べる。

(1)説を取る曾憲通氏は、「囟」字が周原甲骨にも見られることを指摘し、両者が同じ語であると考えている。ところが「囟」の現れる語順を見ると、包山楚簡と周原甲骨の間に違いがあるのである。

まず楚簡では、「囟」は主語の前に置かれており、これが曾氏が発語詞説を主張する根拠になっている。

(4)願原之月己酉之日、囟一戠(識)獄之室(主)至(致)命、不至(致)命、陞(證)門(問)又(有)敗。(包山楚簡二二八)

願原の月（楚曆五月）の己酉の日、一裁判官に復命するよう「囟」したが、復命せず、裁判の進行に支障を生じた。

(5)囟左尹坻遶(踐)遶(復)処(處)。(包山楚簡二三八)

左尹坻が復処（招魂を行なう場所？）に行くよう「囟」する。

しかし周原甲骨では「囟」は主語の後ろに置かれている。

(6) 卧曰：並凶克事。

幽凶克事。(H11: 6+32)

ト占の結果は、並(人名)は職責を果たすだろう。

幽(人名)は職責を果たすだろう。⁽⁶⁾

周原甲骨は破損が激しく、文意を取るのが容易ではない。したがって「凶」の機能も明確ではなく、後に述べるようにこの字を発語の虚詞と解釈するのが定説になっているとは言い難い。上例に見る「凶」の語順の違いは、包山楚簡と周原甲骨とは「凶」の機能が異なることを示していると考えるのが自然である。私は楚簡の「凶」の訓釈に周原甲骨を援用することには躊躇せざるを得ない。

(2) 説を主張する李零氏も周原甲骨の「凶」に対する訓釈を自説の論拠としている。李氏が依拠しているのは、李学勤氏や夏含夷氏の説である。しかし両氏の説にはやや違いがある。まず李学勤氏は、王宇信氏との共著の中で周原甲骨の「凶」が『詩経』等の古典に見られる虚詞「思」または「斯」に相当することを指摘する(一九八〇、二五〇—二五一頁)。李零氏が直接引用するのはこの論文であるが、李学勤氏等ここでは「凶」の意味機能については明言していない。その後、李学勤(一九八六、七一頁)では論を進展させ、『左傳』や『国語』の卜筮命辭に使われている「尚」と同様、「庶幾」の意味を表す「命令副詞」であると考えるに到る。⁽⁷⁾周原甲骨の「凶」は主語と述語との間に使われており、確かに副詞であろう。しかし上例(4)(5)で見たように、包山楚簡では「凶」は主語の前に現れる。「尚」に類する副詞がこのような位置に現れるとは考えにくい。一方、夏含夷(一九八九、三〇五—三〇六頁)は動詞であると明言し、『詩経・大雅・文王』『思皇多士』に付けられた鄭箋「思、願也」、『爾雅・釈詁』「思、願也」、『方言・一』「願、欲思也」などの訓詁によって「願」の意であると説いている。⁽⁸⁾「思」は本来思考することを意味する動詞であるが、意味的に「願」と重なり合う部分がある。

(7) 以義兵從思東歸之士、何所不散。(史記・淮陰侯列傳)

正しい戦という名目のもと、東に帰ることを考えている兵士を従えるなら、いかなる敵も蹴散らされるでありましよう。

「東に帰ることを考える」というのはとりもなおさず「東に帰りたい」からに他ならない。語彙的には「思」が使われていても、その表現価値としては「願」と同じであると言つてよい。「思、願也」という訓詁はこの点を捉えたものと解される。思考を意味する動詞「思」が願望を表すことは十分可能であると考えられる。李零氏は「表示願望語氣的詞」と述べるのみで、その詞性に関する見解を明らかにしていない。しかし「𠂔」が包山楚簡に於て副詞であるとの解釈が不可能な以上、もし願望を表すなら動詞「思」と読むしかないであろう。工藤氏(一九九六)は「もとむ」と訓じていることから、動詞説を取っていることが分かるが、訓詁学的な論拠は示されていない。陳偉氏(一九九六)は「願」と訓ずる根拠として、夏氏が挙げた訓詁の他に、包山楚簡に於て「𠂔」が「命」と異文の関係にあることを指摘し、池澤氏(一九九八)も「命」に義が近いと考えるのが妥当であると述べて、工藤氏の訓を是認している。

(8) 願奈之月、命一執事人以至(致)命於郢。(包山楚簡一三五B)(例(4)と対照)

願奈の月(楚曆七月)に、一役人に郢まで復命するよう命じた。

(9) 命攻解於漸木立(位)、𠂔(且)遲(徙)𠂔(其)處而𠂔(樹)之。(包山楚簡二五〇)(例(1)(2)と対照)

漸木位(臨時の位牌?)⁽⁹⁾に対して攻解し、且つその安置場所を移動して立てるよう命じる。

ところが「𠂔」「命」が同様の文脈に用いられるという現象は、陳偉(一九九四、六九頁)が「𠂔」を「使」の仮借字と判断した根拠そのものである(「𠂔(思)」「使」は共に之部心母で仮借の許容範囲内)。つまり陳氏は同一の現象に

基づき、先には仮借によつて「使」に読み替え、後には訓詁によつて「願」の意味であると考えたのである。しかしこれだけでは単なる解釈の違いに過ぎない。他に論拠となる現象はないだろうか。

そこで注目されるのが、「思」と「使」の間にあるべき句型の違いである。「思」「知」「願」「欲」「聞」「見」等の感情や感覚を表す動詞は一般に主述構造、いわゆる埋め込み文を目的語に取ることができ、その際埋め込み文の主語と述語との間に「之」が置かれることがある。

(10) 王思子文之治楚國也、曰…「子文無後、何以勸善？」（左傳・宣公四年）

王は子文が楚国を治めたことを思い、「子文に跡継ぎがないようでは、どうして善を勧めることができようか」と言つた。

(11) 願王之以毋遇喜奉陽君也。（馬王堆帛書・戰國縱橫家書九二）

王様が（楚と）遇を行なわないことで奉陽君を喜ばせてくださるようお願いします。

私は出土資料に於ける埋め込み文の句型を調べたことがあるが、「之」は秦系資料には全く現れず、旧六国系の文献では高頻度で用いられていたことを見いだした。⁽¹⁰⁾

	馬王堆帛書老子乙本	10 (91%)	1
同	戰國縱橫家書	60 (87%)	9
包山楚簡		7 (70%)	3
		V [NP≠VP]	V [NPVP]

郭店楚簡

16 (76%)

5

(12) 子左尹命漾陵之宮夫^三（大夫）設（察）州里人墮鋤之與^二（其）父墮年同室與不同室。（包山楚簡二二六）

子左尹は漾陵の邑大夫に命じて、州里人の墮鋤が父の墮年と同居しているか否か調べさせた。

(13) 是古（故）谷（欲）人之恚（愛）^一 𠂔（已）也、則必先恚（愛）人^二 谷（欲）人之敬（已）也、必先敬人。（郭店楚簡・成之聞之^{二〇}）

それ故人に愛してもらいたいなら必ず先に人を愛し、人に敬ってもらいたいなら必ず先に人を敬う。

ちなみに郭店楚簡には「欲」が埋め込み文賓語を取る例は五例あるが全て「之」を伴う。このような傾向に照らせば、動詞「思」が埋め込み文賓語を伴うとき、その主語と述語との間に「之」が高頻度で現れることが期待される。

これに対し、「使」「命」「令」等の使役を表す動詞は一般に兼語句型（連動式）を取り、埋め込み文形式の賓語を取ることはない。山根真太郎（一九九六）は『晏子』や『莊子』の使役文に「之」を伴う埋め込み文が賓語を構成する事例を指摘しているが、これ自体が非常に稀な現象であることは言を俟たない。そこで包山楚簡等に於ける当該字が、もし「使」であるならば、その賓語（若しくは後ろに立つ主述構造）は原則として「之」を伴わないことが期待される。

上の観点から「𠂔」の例文を見て行くと、例(4)(5)では「之」が使われていない。また九店楚簡の次の例も「之」は使われていない。

(14) (某) 敢告桑（？）滕（？）之子武彊（夷）……君昔受某之璽（幣）、芳糧、𠂔某迷（來）遘（歸）飢（食）

故人。(九店楚簡四四)

何某(戦死者の遺族)が桑滕の子武夷の神に申し上げます。……あなた様は昔何某の聖幣、芳糧(裂帛や穀物の供物)を受け取られ、何某が故人(戦死者)に食物を与えに来るよう「凶」しておられます。

鍵となるのは包山楚簡の次の例である。

(15) 凶惓之𦵏叙於惓之所誹(證)、與𠂔(其)𦵏又(有)情(怨)⁽¹²⁾、不可誹(證)……同社、同里、同官不可誹(證)；匿(暝)至從父兄弟不可誹(證)。(包山楚簡二三八反)

惓の敵対者が惓の証言内容について意見陳述するよう「凶」する。(但し)その敵対者と怨恨のある者、同社、同里、同官にある者、従父兄弟以内の親族は(不公正な証言をする可能性があるので、その敵対者の陳述内容について)証言させることはできない。

上例では「凶惓之𦵏叙於惓之所誹」の解釈が問題となるが、「凶」を「使」の仮借とした陳偉(一九九四、七〇頁)は、『思惓之來叙于惓之所証』、蓋即讓舒惓前來講述他所提出的証人的情況」と述べており、主語「惓」と動詞「𦵏」(來)の間に「之」が挿入された構造と解釈している。しかし、「使」は一般にこのような句型を取らず、陳氏の読みが正しければ、「使」の仮借という解釈に大変不利である。ところが陳氏が動詞「來」と読んだ「𦵏」字は、実は「仇」に相当することが郭店楚簡により明らかになった。

(16) 《寺(詩)》員(云)……「皮(彼)求我則、女(如)不我得、執我𦵏𦵏、亦不我力。」(郭店楚簡・縑衣一九)

(17) 《寺(詩)》員(云)……「君子好𦵏。」(郭店楚簡・縑衣四三)

上例の「𠂔」は現行本『礼記』ではいずれも「仇仇」「好仇」に作っている。之部の「来」を諧声符として見られる字が、幽部の「仇」に仮借するという点は問題として残るが、「仇」と読むことに問題はない。すると例(4)は、「𠂔」を出頭させてその証人についての状況を述べさせる」ではなく、「𠂔」の敵対者に、𠂔が証言した内容について述べさせる」、つまり反対証人に類することを行なうよう要請していると解釈される。従って、この例も「之」を伴う埋め込み文が賓語を構成しているのではないことになる。

私が現在公開されている楚簡から見いだした「𠂔」字句の内、その後ろに主語述語のそろった構造を伴う者は上に挙げた四例であるが、「之」を伴うものは現在のところ存在しない。用例は少ないとはいえ、埋め込み文形式の賓語を取る動詞には、賓語部分に「之」字が高頻度で用いられていることに鑑みるなら、「𠂔」を願望を表す動詞「思」と解釈し得る可能性は非常に低いと言わざるを得ないのである。

郭店楚簡では使役を表す動詞は「事(使)」が使われている。

(18) 古(故) 曰：民之父母(母) 新(親) 民易、𠂔(事(使)) 民相新(親) 也難。(郭店楚簡・六德四九)

民の父母たるものが民に親しむのは容易いが、民どうしを相親しませるのは難しい。

ところが包山楚簡では使役の「使」を「𠂔(事)」で表す例が一例もない。⁽¹³⁾ 常語であるべき「事(使)」が一例もないこと自体、包山楚簡では「使」が「𠂔」字によって表された一つの傍証となるのではなからうか。

注

(1) 「𠂔」「𠂔」等の祭祀儀礼に関する用語については池澤優一九九八を参照。池澤氏は、「人禹に攻解」云々のいわゆる「禱辞」は祭祀を行なった記録ではなく、「第一次占辞」を承けて降祟災禍を解除する方法を貞人が提示したものであり、(中略) その内

どれを選択して現実に祭祀を執行するかは占貞主体（クライアント）側に委ねられていたと考えている（二三頁）。訳文で過去形を用いないのはこの理解に基づく。

(2) 曾憲通（一九九三A、五五頁）は、子彈庫楚帛書中の「思」字を「思」と釈す根拠として望山楚簡のこの箇所を挙げている。

(3) 大徐本（二篆一行本）説解「从心囟聲」による。しかし「囟」の大徐反切は「思進切」で、これによれば上古音は真部と推定されるから、之部の「思」と矛盾を来す。段注本では説解を「从心从囟」に改めている。また、一九九〇年湖南省遂陵県馬馬嶺戰国楚墓出土の砮碼に「分囟益」という3字の銘文があり（『考古』一九九四年第八期）、韓偉民（一九九四、七一頁）、劉彬徽（一九九七、三一頁）らは真部の音と対転の関係にある脂部の「細」と釈し、「分細鑑」と読んでゐる。ただし銘文が短いのでその可否は判断し難い。なお本文で述べたように包山楚簡の「囟」は「思」とも書かれ、これによるならその上古音は之部と認めざるをえない。「囟」は「思」の省形の可能性も考えられよう。

(4) 近年の著作の中では、呉郁芳（一九九六、七五頁）がなお「鬼」説を取っている。

(5) この論文は一九九二年に開催された中国古文字研究会で発表されたものである。後に『王哲玉先生八十寿辰紀念論文集』（南开大学出版社、一九九四年）に収録されるが、私はまだ入手していない。

(6) 「𠂔」字は『説文』三下・卜部に見え、「卜問也」という説解がある。通常はこれを利用して「𠂔曰」以下を命辞と解釈する。しかし裘錫圭（一九九七、二九頁）は、「𠂔」は「兆」と訓むべきであり、以下は占辞であるという新説を主張している。

(7) 例えば『左傳・文公』八年に「十八年春、齊侯戒師期、而有疾。醫曰：『不及秋、將死。』公聞之、卜、曰：『尚無及期。』惠伯令龜。卜楚丘占之、曰：『齊侯不及期、非疾也。』君亦不聞。令龜有咎。』二月丁丑、公薨。」この条に対し、楊伯峻『春秋左傳注』は「尚、表希冀祈請之副詞」と注している。

(8) 夏氏は例(6)等の卜辞を命辞であるとの理解に立っている。しかし注(6)に引いた裘錫圭氏の言うように、占辞であるとの説が正しいなら、願望を表す動詞が占辞に現れるというのは不自然に感じられる。また夏氏の訓みに従えば、例(6)は主語の「並」自身が職務を全うできることを「願う」と読まざるを得ないが、そのような解釈は命辞としても不適当である。

(9) 「漸木立」の解釈は曾憲通（一九九三、四一五頁）を参照。

(10) 『老子乙本』『戦国縦横家書』『包山楚簡』の数値は大西克也（一九九四、二八頁）による。郭店楚簡は今回新たに統計を取った。なお、「爲、以爲、謂、曰、云」等、発せられた言葉や心中の思考を直接表現する動詞は、之字構造を取ることがない。こ

これらの動詞は統計から省いてある。

- (11) 字釈並びに内容に関して、李零（一九九七、七五九―七六〇頁及び一九九九、一四五頁）を参考にした。
- (12) 「情」を「怨」と読むのは、李運富（一九九七、一一四頁）及び黄庚靈（一九九七、二四三頁）による。李氏は文字を「情」（忿怨の義）と釈した上で、「有情、不可證」者、言與乙方有仇怨之人、不可爲甲方作證說話」と解釈している。『札記・緇衣』「民惟日怨」を郭店楚簡『緇衣』一〇号簡が「民惟日情」に作っていたことから、李、黄両氏の説が正しいことが確認された。
- (13) 「𠂔」は本来「兗、弁」（「弁」は或体）に比定される文字で（李家浩一九七九）、郭店楚簡では「辨、変」等の仮借字として使われている。しかし「事」と字形が似ているためしばしば混用される。なお使役動詞「使」を表す場合、全て「𠂔」で表記されていることは注目に値する。

引用資料

- 包山楚簡…湖北省荆沙鐵路考古隊…『包山楚簡』、文物出版社、一九九一年。
- 郭店楚簡…荆門市博物館…『郭店楚墓竹簡』、文物出版社、一九九八年。
- 九店楚簡…湖北省文物考古研究所…『江陵九店東周墓』、科学出版社、一九九五年。
- 望山楚簡…湖北省文物考古研究所…『江陵望山沙塚楚墓』、文物出版社、一九九六年。
- 周原甲骨…王宇信…『周原甲骨探論』、中国社会科学出版社、一九八四年。

参考文献

- 陳偉一九九四…『包山司法簡一三・一三九号考析』、『江漢考古』第四期。
- 陳偉一九九六…『包山楚簡初探』、武漢大学出版社。
- 大西克也一九九四…『秦漢以前古漢語中の「主之謂」結構及其歴史演變』、『第一屆國際先秦漢語語法研討會論文集』、岳麓書社。
- 韓偉民一九九四…『遼陵楚墓新近出土銘文碼碯小識』、『考古』第八期。
- 何琳儀一九九三…『包山楚簡選釋』、『江漢考古』第四期。

何琳儀一九九八『戰國古文字典』、中華書局。

黃庚靈一九九七『楚簡札記六則』、『文史』第四三輯。

李家浩一九九七『積升』、『古文字研究』第一輯、中華書局。

李零一九九二『包山楚簡研究（文書類）』、『中國古文字研究會發表論文』、『王哲玉先生八十壽辰紀念論文集』（南開大學出版社、一九九四年）所収（未見）。

李零一九九三『包山楚簡研究（占卜類）』、『中國典籍與文化論叢』第一輯、中華書局。

李零一九九七『古文字雜識（二則）』、『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』、香港中文大學。

李零一九九八『說九店楚簡』、『考古學報』第二期。

李學勤一九八六『統論西周甲骨』、『人文雜誌』第一期。

李學勤・王宇信一九八〇『周原卜辭選釋』、『古文字研究』第四輯、中華書局。

李運富一九九七『楚國簡帛文字構形系統研究』、岳麓書社。

劉彬徽一九九七『新見楚系金文考述』、『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』、香港中文大學。

劉彬徽、彭浩、胡雅麗、劉祖信一九九一『包山二號墓簡牘積文與考釋』、『包山楚簡』、文物出版社。

彭浩一九九一『包山二號楚墓《卜筮祭禱》竹簡的初步研究』、『楚文化研究論集』第二輯、湖北人民出版社。

裘錫圭一九九七『積西周甲骨文的「卧」字』、『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』、香港中文大學。

吳郁芳一九九六『包山楚簡卜筮簡牘積釋』、『考古與文物』第二期。

夏含夷一九八九『試論周原卜辭田字兼論周代貞卜之性質』、『古文字研究』第一七輯、中華書局。

于成龍一九九八『包山二號楚墓卜筮簡中若干問題探討』、『出土文獻研究』第五集、科學出版社。

曾憲通一九九三A『長沙楚帛書文字編』、中華書局。

曾憲通一九九三B『包山卜筮簡考釋（七篇）』、『第二屆國際中國古文字學檢討會論文集』、香港中文大學。

朱德熙・裘錫圭・李家浩一九九六『望山一、二號墓竹簡積文與考釋』、『江陵望山沙塚楚墓』、文物出版社。

池澤優一九九八『祭られる神と祭られぬ神——戰國時代の楚の「卜筮祭禱記錄」竹簡に見る靈的存在の構造に関する覚書——』、『中國出土資料研究』創刊号、中國出土資料研究會。

工藤元男一九九六…簡帛資料からみた楚文化圏の鬼神信仰、『日中文化研究』第一〇号、勉誠社。
山根真太郎一九九六…古代漢語の使役文における「之」をめぐって、『中国語学』二四三号。

附記：本稿は一九九九年十月三十日、お茶の水女子大学で開催された日本中国語学会第四十九回全国大会で発表した原稿を加筆訂正したものである。佐藤進、古屋昭弘会員を始め、当日貴重なご意見を賜った先生方に、改めてお礼申し上げます。